

見ることも聞くことも痛ましいことばかり、大きなことも小さいことも、どうにもならぬ悲しいことばかりである。しかもこれをどうすることも出来ない。思えば憂しと見し世ぞ今は恋しきである。しかし、これがこの世の実相である。これより外に、具体的な人生はないのである。おどろいては念仏し、悲しんでは念仏し、たまげでは念仏し、念仏するより外には何等の能のない人間である。たゞこの世をこの世の如く領解し、我を我の如く領解し、今日を今日の如く領解し、会う人を会う人の如く領解して、念仏申させて頂くことが、私に出来ることの全てである。

悲しい時には泣くがよく、嬉しい時には喜ぶがよく、誤解は誤解でよく、正解は正解でよい。人間はよくよく子どもっぽくもつぽくも出来ている。善く誤解されたら喜び、悪く誤解されると腹を立てる。それで誤解された時、一番正体が現われる。とにかく、あるがままを受取つて念仏申す、これより外には、古の聖賢といえども出来なかつたのである。

「あるがままを受取つて念仏申す」。何でもないもやすいこと。然りもやすいことだ。だから易行道といわれるのである。「要道不煩」(要道煩しからず。本年の安居講習に論註の中に出た言葉である。一見誰にでも出来そうであつて、出来ないことである。第一に易行ではあるが難信である。極難信である。つまり信じられぬのだ。まことになれぬのだ。「あるがままを受取つて念仏申す」。第一にそれがどうなるか、知らぬ。「すかさされたてまつりて地獄におちたりとも更に後悔すべからず」と御開山はいわれる。どうなるかそれをきめてから信じようといふのが因果顛倒、自力の功利主義である。念仏はそれ自体が真実であつて、人間のたつた一つの本当の生き方である。何かの手段ではない。念仏の目的は念仏である。結果を先に考えて、それから割り出して信心するのではない。念仏は因道には違いないが、どんな結果が出るかは、私の知つた事ではない。いづれ功利的な考え方からは、よい結果は出て来ない。何となれば因がすでに純粹でなく、濁っているからである。

「どんな事に出会つても、あるがままを受取つて念仏申す」こと。誠にこれ以上の事は誰にも出来ない。その易行道がもし本当に一貫相續出来たらどうなるか。それはその人は私のいわゆる人類の教師になるであろう。そして世の悩める人苦しめる人はこの人の所に来て、一言の言葉を聞き、一句の法を聞き、否、会つただけでも苦を軽くし、光に会い、力を与えられるであろう。それは丁度、路傍に自然に湧く泉の様に、多くの旅人の疲れをいやし、喜びを与えるであろう。

「あるがままを受取つて念仏申す」ことは時によつたら命がけの問題である。

吉水の教団は今や最後の時が来た。住蓮坊安楽坊はすでに死刑になった。御師匠法然上人は土佐へ御流罪とつた。御弟子たちは師の老の御身を心配した。法蓮房は言つた、「上人の流罪はただ一向専修の念仏のためであります。しかるに老邁の御身、速い海波におもむきましませば、御命のほども心配でございます。我等が恩顔を拝

し、み教を頂くことも出来ません。又御師匠が流罪になられたならば残った門弟も面目次第も御座いませぬ。かつは念仏禁制は勅命でございます。一向専修をとどむべきよしを奏上しておいて、内内ご化導なきつてはいかゞで御座いましょう。」と申し上げると、上人は「流罪をさらにうらみとしてはなりません。そのゆへは、私はすでに齢八十にせまつています。たとえ師弟同じ都に住んだとてこの世のお別れは近いことでもあります。たとえ、海山をへだつとも、浄土の再会を何で疑いましょう。しかのみならず念仏の興行も都はひさしくなりました。辺鄙におもむいて田夫野人をすゝめん事、年来の本意である。今ことの縁によつて、年来の本意をとげんこと、すこぶる朝恩ともいうことが出来る。この法の弘通は、人はとどめようとしても、法さらいにとどまるべからず……」とて、さらに一人の御弟子に対して御念仏のことをのべられた。

すると御弟子西阿弥陀仏が推参して「かくのごとく御義ゆめゆめあるべからず候。をのをの御返事を申し給ふべからず」と申しければ、上人のたまはく「汝経釈の文を見ずや」と。西阿云く「経釈の文はしかりといえども、世間の機嫌をそんずるばかりです」と。上人の仰せられるよう「われたとえ死刑にをこなはるゝともこのこといわずばあるべからず」と至誠のいろもつとも切である。見たてまつる人、みな涙を流した（法然上人伝）とある。

「あるがままを受取つて念仏申す」ことは時には命がけのことである。法蓮や西阿の輩は今も巷に満ちている。世渡り上手で、妥協してでも一時の平安を求めようとすゝる、事なかれ主義の人間に法然親鸞の真意がわかろうか。果せる哉。法然上人は「田夫野人をすゝめん事、年来の本意なり。しかれども時いたらずして、素意いまだはたせず。いまの事の縁によりて年来の本意をとげんこと、すこぶる朝恩ともいふべし。」といわれ、親鸞聖人もまた「大師聖人源空もし流刑に処せられたまわずば我また配所に赴かんや。もしわれ配所に赴かずんば何によつてか辺鄙の群類を化せん。是れなお師教の恩致なり。」と仰せられた。御流罪のままを受取つて念仏されたから、御流罪が生きて、辺鄙の群萌に念仏を伝え、自行化他これによつて進み、真に生きられたではないか。

「あるがままを受取つて念仏す」ということは、たゞ外に起きたことを、あるがままに受取つて念仏するだけではなく、内にまたどんなこゝろがおころうと、内にどんな自分のすがたが見えようが、おきて来るままを受取つて念仏申すのである。そしてこのことは違うようで同一のことなのである。たとえば、他人が自分のことを悪く言つたのを聞くと、外に何があろうとそのままを受取つて念仏する人は、その悪口を聞けば自分の心の中にもそれに応じて腹が立つとか、情ないとか、或は「それはよいことを聞いた、私の心のすがたが見えて来た。有難う」とか、何とか出て来るであろう。その出て来ることによつて、それを見て念仏申すのである。

鬼が出てても大蛇が出てても、それが決して御念仏の邪魔にならない。邪魔にならないどころか、見えるにつけていよいよ願力を仰ぎまいらせて念仏する。また、内に悪い心が起きたことが、これでいいか知ら、こんな恐ろしい心がおこるようでは助かつていないのではあるまいか、と思われるようでは、それはまだ心の底に、定散自力の機が残っているのであるから駄目、もつともつと本願のお意を聞きこんで、その自力の心が無くなるまで聞いてゆかねば弘願の信ではない。やっぱり「とはいものゝ善人が助かるのだ」という自力の疑惑、善人意識が残っているのである。それがあつても内は何が起きて来ようと念仏することは出来ない。又その人は、外に何が起ろうと念仏することは出来ない。

「自分の信心決定は確かだが、嫁の仕方が悪いで念仏が申されん」、姑が悪いで、誰が彼が気に入らないで、念仏が申されんと、自分を念仏させぬ理由が外にあるように見えるのは、外ではなくて、魂の奥にあるのである。それが即ち邪見傲慢自力疑惑である。こんな人は、多くは御法を聞いても常に名利と相応せしめている。一旦名利心をつかれると必ず信心も安心もなくなり、十年二十年の師弟関係でも、怒つて逃げてゆく。これを善導大師は「業行を作すといえども、心に輕慢を生じ、常に名利と相応するが故に、人我自らおおうて同行善知識に親近せざるが故に」と誠められた。

名利心の満足が凡夫のいのちである。それが見えて来るまで、私の仏法を求める心が名利心であるものかと思つている。だからいけないのである。この二十願自力念仏の自己を見せて頂いて、あやまり入るところに、十八願の世界がある。

かくして、外に念仏を行ぜさせない原因があると思つているままが、内に癌が残つているのである。「あるがままを受取つて念仏申す」こともまた難いかなである。

生や念仏し、死や念仏し、順境に念仏し、逆境に念仏して、一生相続するならば、それは実は、如来本願大悲智慧真実が一貫して我が業苦を受取りたもうてあるのである。これを撰取不捨といい、廻向というのである。私が私を受取り、私が私の宿業を背負つたままが、たつた一人しかいないこの可愛そうな私を私が抱き、私が背負つたままがほんとうは、常住真実なる無量寿のみ親に抱かれているのである。御念仏は私が称えるままが、如来久遠の名告りである。忍従の行者、念仏の上にかおるかおりは、光る光は、そのまま、撰取の仏智が光つているのである。あるがままを受取つて念仏申せといえ、依然として煩惱が主体のようだが、そうではない。名号六字が主体となつて、一切の煩惱が名号の中に撰められているのである。だから人生の一切の生活経験がお念仏の中に収まるのである。内にも外にもお念仏からはみ出すものはないのである。もしはみだすものがあるなら、何時も言う通りに、念仏の汽車に乗らずに、オモチャの汽車を持つて走つているのである。

無実の罪で越後に流罪になられた時には、どんな心も起きたであろう。悲しかったであろうし、さびしくもあり、残念でもあり、無念でもあり、凡そ人間として起きるほどの心はみな起きたであろう。これが聖人御一生の一番大きな谷底である。その

時、一切衆生の起すほどの心は起しきられて、しかもそれにとどまらず、内に大悲の光懐に転じて、愚禿親鸞と大地に手をついて、久遠の宿業を知り、御念仏申されたからこそ、大地の聖者、群萌の父、百世の善知識たる聖人、法蔵菩薩さながらの正定聚の菩薩が拝まれたのである。一切衆生の苦悩を背負うて重担とする菩薩道の聖容が拝まれたのである。

しかるにわれわれは、少しでも割り切れぬことに出くわせば、何とかしてこれを割切ろうとする。割切ろうとするとは、白黒をはつきりして自分がよいものになろうとする。しかし人生は矛盾そのものであつて決してその全てを割り切ることは出来ない。そこでついには行き詰る。矛盾に出会つても割り切ろうとする。そのまま内に転じてお浄土へ流してお念仏申すこと、これもまた私が一生涯言い続けたことの一つである。

腐つた叡山の僧が、美しい吉水の教団を荒したのだ。正しいもの、真実なものが、腐つたもの、亡びるものに迫害されてちりぢりになり、罪もないのに流されてゆく。それが矛盾である。しかし、そこにこそ、やがて御念仏が全国に弘まる機縁が生れたのである。法然上人も親鸞聖人も決して亡ばなかつた。滅んだのは無理をする腐つたものたちであつた。

かくてこの世に生きるには「あるがままを受取つて念仏申す」ということにつきることを重ねて言つてペンをおく。夕の勤行では今頃「念仏には無義を義とす」を頂いている。要するにそのことである。